

感興と煩悶の狭間で —— 渡辺淳一『影絵』の研究 ——

山田健一朗

論文要旨

「人間とは何か」という命題にこたえようとするとき、セクシュアリティ・ジェンダーの問題を抜きにしては真正面から答えることはできないと言っても過言ではあるまい。とりわけ、子供から大人になる過渡期（いわゆる思春期）における人間の性的な関心と欲望の萌芽は、人間の持つ根源的な宿命を考えさせるに十分な材料となるはずだ。本稿ではテキストとして渡辺淳一『影絵』（1990）を取り上げてみたい。「ある少年の愛と性の物語」と副題がうたれたこの作品は、作者と思しき一人の少年がセックスへの関心を高めながら成長する様子を自伝風に描いており、先に記した人間が性をどのように根付かせていったのかを考えるのに最適な作品と言える。自らの性について告白する文学作品は多数存在するので、他の作家作品・時代背景も参照しながら、渡辺作品における性の問題そして、人間と性の問題を考察してみたい。

一．はじめに

思春期の性、というと、少しほろ苦い感覚が呼びさまされるのは、私だけだろうか。「初体験」や「初恋」等の言葉に代表されるように、人間の性的関心あるいは嗜好の萌芽は、極めて個人的なレベルの問題ではある。それだけに文学作品に表象される思春期の性の問題は、私たちに「性とは何か」という疑問を改めて考えさせてくれる格好の題材である。

そこで本稿では、渡辺淳一『影絵』を取り上げ、文学作品が人間の、とりわけ思春期の男性の性的関心の萌芽をいかに表象しているかを考えたい。

二．「性的感興」とは何か

渡辺淳一『影絵』は、雑誌『婦人公論』に一九八三年一月号から一九八四年五月号まで連載された長編小説である。第一部「少年」と第二部「男性」の二部構成となっていて、高村伸夫という男性を視点人物に設定したうえで、その伸夫が自らの少年期から青年期にかけての性的経験や関心の変遷を振り返っていくという形式で構成されている。一人の人間（男性）がいかにして性に関する関心と欲求を駆り立てていくのかを生々しく描き出しており、読者、とくに男性の読者にとっては自らの思春期の「性的感興」と重なり合う部分があるために、感情移入がしやすい。ちなみに伸夫の少年時代は終戦直後で、この時代設定は後から重要な意味を持つてくる。

渡辺淳一が元医師であったことはよく知られており、代表作である『冬の火花』（一九七五年）や『遠き落日』（一九七九年）は、医学に関する作品である。しかし、それ以外に渡辺が現在も文壇で一定の評価が高いのは、志村有弘が指摘しているように、「男女の心の揺れ動き、そして性描写を美しく書くことにかけては、他の追従を許さぬ」力があるからであろう。そういう意味で『影絵』は、最近の渡辺の代表作である『失楽園』（一九九五年）や『愛の流刑地』（二〇〇四年）など、彼の得意とする男女の愛憎劇の背後に隠れる渡辺自身の性意識が色濃く投影された作品といえる。なぜなら、男女の心の揺れ動きと言うよりは、むしろ男性の性に対する心の揺れ動きに焦点を当てているからだ。なお、扶桑社文庫版の腰巻には、「渡辺淳一の原点！」と大書され、それに続いて「少年期までの狂おしい悶え！愛さずにはいられない」と記されている。性に関する少年の悩みを主題とした作品には、古くは森鷗外の『ウイタ・セクスアリス』（一九〇九年）や志賀直哉『濁った頭』（一九一〇年）などがあるか

ら別に珍しくもない。しかし、同様な題材を現代の作家が取り上げると、また異質な性の在り方が立ちあがってくる。そういう点では、男女の性愛について様々な小説を発表してきた渡辺淳一の中でも異質な作品であるといえる。

その第一部「少年」の書き出しは、「性的感興」とはなんであるか。」と、いきなり読者への刺激的な語りかけで始まる。この語りかけは、例えば、第一章「少年」の冒頭で、主人公仲夫の口を借りて次のように少年期の性について説明していることと連動している。

この少年期の性への好奇心は、興味とか関心という言葉では言い尽くせない、それらを包括してなお湧き起る「感興」といったたぐいのものである。²

この記述に従うならば、少年期における性的関心とは、単なる「関心」ではない。「性的感興」と言う用語は、そうした飽くなき性への欲求を象徴する表現として、この小説の一つのキーワードとなっている。例えば、「性的感興」とは、この作品では「性的興奮」ではないとされる。先に示したように、「興味とか関心」という言葉では言い尽くせない」として使われている。それはいわば自らの中に湧き上るマグマのようなものであり、ゆえに「興奮」ではなく、「感興」と表現されるのである。では、次のような表現はどうか。

たとえば朝、尿意を感じて目覚めたとき、自分のものが大きく膨らんで緊張している。(中略)とあって、それがすぐ性的興奮につながるわけではない。それより、尿意の度に大きくなる自分のものに、気恥ずかしさと一種の胡散臭さを感じていたかもしれない。そしてそれは、先ほどの誇らし

さと表裏をなすもので、両者を合わせれば、「なにやら厄介な感じ」とでもいふべきものかもしれない。

ここで重要なのは、尿意のためにペニスが勃起することを仲夫は「誇らしく」思うとともに、「気恥ずかしさ」と「胡散臭さ」を感じていることである。この表裏一体の感情は、やはり「性的興奮」というよりは、むしろ人間の生理現象による一時的な変化を目的の当たりにしたある種の戸惑いと言った方が適切であろう。ゆえに、仲夫は「なにやら厄介な感じ」を抱くのである。

同時に先の引用部分と連動して注目すべきは、「男の性において最も安定した時期と言えば、幼児から小学校を卒業するまでの十年前後の期間かもしれない」と説明しておいて、さらに「この間男は性行為をいとなむ」とはなし、性的問題に悩むこともない。性に関してはひたすら無欲で、欲望においても空白の期間である」と定義している点だ。つまり幼少期すなわち「小学生までの時期は、いまだ性に目覚めず、それゆえに性に悩み迷うこともなく、ひたすら純粹で無邪気でいられる」期間だというのだ。ゆえに少年は無邪気で純粹であるがゆえに、「性的感興」が人間の成長の上での影の部分として強調されていることがわかる。

ただし、矛盾しているのは、先に引用した直後に「だがこの時期はたとえ行為としておこなわれなくとも、性的心情そのものまでは消滅しているわけではない。いやむしろ、肉体的とは別に精神的にはかえって亢進することもあり、それだけ複雑で悩み多き時期とも言える」と述べていることで、そうした矛盾を抱えるところに、渡辺作品の登場人物の人間臭さがあり、元医師としての渡辺淳一の特質が見え隠れする。先にも触れたように、渡辺淳一が医師としての知識や経験を作品の中で組み込んでいることはよく知られているが、『影絵』

でもそれは例外ではない。例えば、少年期の定義として次のように作品の中で解説して見せるのである。

心理学者のシュブランガーは八歳から十二歳を、コメニウスは七歳から十二歳を少年期としている。いずれにしても「少年」というあいまいな言葉を使って小学生と中学生を区分けすることは不可能だし、精神的肉体的な面だけを取り上げても、個人差が多く、明確な分類は難しい。

シュブランガーやコメニウスの説を援用することで、男性の性欲についての問題を男性特有の問題として提示することに成功している。例えば、次節で詳述するが、伸夫が中学生になってオナニーを覚えた時の記述として、「そもそも女体への憧れとか、女性の優しさに心ひかれるといった異性を対象としたものではなく、自分の内側からふつふつ湧き起る性欲そのものを実感する」のが男性だと述べるくだりは、男性の性欲が「ふつふつと湧き起る」「厄介な感じ」のものとして結び付けることに有効に作用している。岡田洋司が指摘するように、男性の性欲が「セクシュアリティにおける対者である女Ⅱ女性を対象にして展開していく」という特質があるとすれば、そうした「女Ⅱ女性を対象にして展開」する基盤として、あるいは男性特有の矛盾した性意識が存在することを概念化したのが、「厄介な感じ」という表現ではなかったか。つまり、『影絵』に貫かれているのは、個人の性意識の芽生えと煩悶をつとめて一般化しようとする姿勢である。だからこそ渡辺は「性的感興」を「性的興奮」とは区別してみせるのである。こうした男性の「性的感興」の概念は、冒頭の語りかけと連動していることは言うまでもない。「性的感興」は作中人物の伸夫だけではなく、全ての男性に共通する問題となって一般化する。つまり、

少年期の男性の性が、自らの生殖能力を備えていく段階で抱く根源的な性と生
の不安という形となって表明されていると言っている。

では、少年期特有の性と生への不安を、この後『影絵』ではどう描くのかを見てみよう。

三、オナニーへの感興と一般化

先に、少年期の性の問題を一般化しようとするところにこの小説の特質があると述べたが、そのことを象徴している描写は、伸夫の「自慰」への没頭である。「質実剛健」いわゆる「男らしい」男性像を理想とする社会が伸夫の少年時代の一般的常識であった。したがって、オナニーを覚えるということとは、それだけで背徳的なものであったに違いない。「伸夫が自慰を覚えた」のは「中学二年の夏」で、「あるとき何の前触れもなく、思いがけないことから知るにいたる」。その時の描写を引用してみよう。

正直言って、そこまではほとんど無意識だったので、伸夫はでてきたものをみて驚いた。……思いがけなく、固く、熱い。しかも指先にかすかな搏動まで伝わってくるようである。伸夫は自分が凄く悪いことをしているような気がして、出てきたものを股間におさめようとしたが、一度大きくなったものは容易にパンツのなかにおさまろうとしない。指で先端をおさえながら、さらに二、三度繰り返すうちに、ふとペニスの先が両股にはさまれた。瞬間、ペニスの先に付きぬけるような快感がわき出て、伸夫は慌てた。いったいこれはどうしたことなのか。何故こんなに気持ちになったのか。どこかになにかの仕掛けでもあったのか。

和机に座って辞書で卑猥な言葉を調べていた仲夫は(本文によると当時
は、「辞書一冊あれば十分性的興奮状態に没入することができた」のだという)、
自分のペニスが勃起していることに気がつき、そこから「ペニスの先が両股に
はさまれ」と快感が得られることを学習するのである。しかし、「自分が凄
く悪いことをしているような」気がするとともに、パンツにペニスをしまおう
とした瞬間に快感が走るという感覚の二元化ともいえるべき現象が細かに描写
されていることに注意したい。

こうした仲夫の行動は、思春期の少年ならば一度は必ず経験する煩悶として
一般化できるが、実はオナニーを罪悪としてみなす価値観は、近代のセクシュ
アリテイの歴史を忠実に再現したものとして注目できよう。赤川学は、「現在
では想像しにくいことだが、オナニーについて語る言説がオナニー有害論以外
のものではありえない時代が」あり、それらは「現代の私たちがらみて、当時
の人々のオナニーに対する狂騒ぶりは滑稽ですらある」と述べている。同時
にこのようなオナニー有害説は、純潔教育などに代表されるように、近代以降
の性教育のあり方つまり子ども親や教育観と深く結び付いている。性欲は「制
欲のツール」として存在し、学校や家庭においては「性についての「正しい知
識」を与えること」「学生生徒は苦しむこともなく自然と節制するようにな
る」と信じられていた。逆にいうと、「正しい知識」の範疇外で氾濫する性知
識に子どもは影響されやすいことを示している。実際『影絵』の中にも、仲夫
が手にしたエロ本の中に、「あまり早いうちに自慰をすぎるとは、ペニス
の発育によくない」と書いてあるのを見て、悩むのである。その悩みを仲夫
はだれにも打ち明けない。すると、オナニーを害毒とする言説が「正しい知識」
としてありエス流の「無垢な、かわき子ども」たちに学校や家庭など教育の
ツールを通して浸透していたとすると、仲夫のオナニー表象は、純粹無垢な子

どもがその枠を逸脱して大人になっていく過程として理解できる。そこでこの
作品における「性的感興」とは性器を触ることへの罪悪感と、それによって得
られる快楽というアンビバレントな意味をもたされていることが明確になっ
てくる。

実際、仲夫は、オナニーを覚えた後、「もしこれを母や先生に知られたら厭
しく叱られるのではないか」と思い、激しい戸惑いを見せる。そして、オナニ
ーを覚えた少年が、母親に対して抱く意識を微妙に変化させていく過程もこの
小説では見事に描ききっている点にも注目が行く。たとえば、仲夫が「たしか
に自慰を覚えて、少年は無口で無愛想な男に変わっていく。なにか悪いことを
しているという罪の意識が、自ら親を遠ざけて一人で貝の中に閉じこもる」と
説明した後に、次のように表現される。

異性のせい、母親が少年を見る目は優しく美しすぎる。少年を純粹で無
垢な者だと思いついでいる。しかし少年はそんなに純粹ではない。無垢と
みえるのは無知の裏返しで、知恵さえつけばいつでも悪いことをする。も
し本当に純粹で無垢であれば、その子は知恵がつかぬまま育ったか、よほ
どの悪知恵に長けた演技者かもしれない。

性に目覚めた少年が、オナニーという「知恵」を付けた時、母親を見る視
線は微妙に変化する。それを本文では、「日々生臭い匂いの中に身を沈め、内
側から突き上げてくる衝動と悔恨の中で揺れ動く」と説明している。自らのオ
ナニー体験が、それまでの「性」厄介」な問題としての価値観を深めていく過
程である。

ただし、注目すべきは、作品の中で仲夫がオナニーに熱中してしまうことを、

男性にとって「必要な行為なのかもしれない」と述べ、「もはや貯め切れなくなった性欲は、自慰という作業で放出してこそ平常心が保たれる」という、オナニーの悲観的肯定とも言うべき説明をしているくだりがあることだ。つまり、「平常心」を保つには、オナニーという背德的な行為も時として必要であることを説いてみせているのだ。そして、「たしかに自慰を覚えて、少年は無口で無愛想な男に変わっていく」ものだと述べ、性の煩悶を一般論にすり替えていくのである。

四、ジェンダー構造の固定化と一般化

こうした「性Ⅱ厄介」という見方を男性の成長にとって不可欠なものとして一般化する傾向は、「母親」という視線と並行して「女」とは何かと言う疑問へと発展していくことに注意したい。母親だけではなく、クラスメイトや近所の若い女性など、「女性」全体に対する性的な関心として書きかえられていくのだ。例えば、『影絵』の第二部「男性」で、共学の新制高校に進学することになった時の伸夫は、「伸夫は自分の隣に、セーラー服の女学生が坐った情景を想像してみるが、具体的なイメージは浮かばない。なによりも女と並んで勉強するというのが現実離れしているし、それでは教室中が女くさくなって勉強どころではない」と思うのである。こうして伸夫は共学への期待と不安にさらされる。オナニーを契機として女の性そのものへの関心を高めていく。ここで注意したいのは、この作品全体を占めている男女観の問題である。例えば、幼い時小便かけごっこに興じた伸夫は、そのことを思い出しながら、次のように考えるのである。

それはともかく、この種の遊びで男の一物を「陽のもの」という言い方を

改めて思い知らされる。まさしく太陽の下で、威勢よく突き出されたペニスは、陽物そのものである。そして、この種の遊びをしない女の子は、自分と別の性であることを実感する。彼女らの牀の奥には、なにか自分達とは別のものが息をひそめているらしく、それが容易なことでは陽の目を見ないことで「陰のもの」というのは、当を得たものと思われる。

ここでは男性は陽でプラスのイメージ、女性は陽でマイナスのイメージと言うジェンダー構造が明確に表現されている。この女性観は、ウィークスの指摘するような「女性恒久的に男性に従属することになっている」という見解と重なり合う。つまり、フェミニズムやジェンダースタディの中でさんざん論破されてきた構造になっているのである。そのことが一層明確化になる、伸夫が中学生になり、学校の木造便所に書かれた卑猥な落書きを見て抱く感想が述べられるくだりである。

たとえばしゃがみこんだ正面の縦板にペニスが描かれ、その先に毛につつまれた割れ目が描かれている。そしてその横に「入りたい」と乱暴な字で書かれている。伸夫はしゃがんでそれを見ながら一人で考える。なるほど、女のはこうなっていて、男のものをあそこに突き刺すのか。想像するうちに、伸夫は次第に納得し、急に大人の世界に仲間入りしたような気持ちになってくる。

女は「入れられるもの」であり、男は「入りたい」そして「突き刺す」ものであるという伸夫の理解は、男女が能動―受動という二項対立すなわちジェンダーによって成り立つものであることを明確に意識させている。そして、伸夫

は、「どうやら女のそこは穴のようになっていことはたしからしいが、その実態は柔らかいか固いのか。そしてどれくらいの大きさで、どうしたらそのなかへ入れることができるのか」と考え、そして「入れるとき、女は黙って入れさせてくれるのか、そしてそのとき女はどんな気持ちになるのか、考えれば考えるほどわからなくなってくる」と考える。女は「入れられるもの」という意識が、伸夫の中の性愛観として固定化されていくのである。

こうした一連の伸夫の描写からわかることをまとめると、男の性は、「厄介な感じ」と「陽」のイメージを共有する半面、女性を自らの性欲を満たす「陰」というイメージのみが付与され、女性は男性の性の萌芽と煩悶を正当化するための補完材料として利用しているということになる。そういう意味でこの作品は、男女のジェンダーを固定化し、画一的かつ徹底的にステレオタイプ化しているともいえるのではないだろうか。しかも、こうした古風なジェンダー観は、この作品の時代設定とも明確に連動していることに注意したい。

伸夫が中学校に入った昭和二十一年は、日本が廃墟の中からようやく立ち上がったときで、たべものはもちろん、住む家もきるものもなかった。町には浮浪者があふれ、人々は闇の買い出しに狂奔し、すべての人がいきるために精一杯で、それ以外のことを考える余裕がなかった。

昭和二十一年というと、終戦直後の混乱期で、人々はそれまで抑圧されていた性意識から解放された。山本明も指摘しているように、「百数種にわたる『カストリ雑誌』が全国にはらまかれ、一冊の雑誌がポロポロになるまで回し読みされた」時代であった。そこには、「当時の正統派ジャーナリズムが取り上げなかった性風俗が満載され、あるいはアメリカ軍兵士とパンパンの交渉がとり

あげられていた」のである。戦後とは、久しく渴望していたエロスを自由に求められる時代でもあったのである。

この伸夫の年齢設定は、実は作者渡辺淳一自身の年齢と合致していることは注目できる。水口義則は、この点について、「永遠のテーマである男女小説の名手の幼少年時代、淳一少年の春のめざめが、伸夫の精神的、肉体的な苦悩と成長の中に、時に面白おかしく、痛切に語られていく」と指摘し、同時に「美しい愛の地獄に揺さぶられる伸夫の感受性は、渡辺さんの後年の長編『失楽園』や『愛の流刑地』に描かれる、性愛の極北としての心中、情死に投影されていることを読みとることができると指摘している。すなわち、伸夫は渡辺の分身としての役割を持たされているのである。すると、この「性Ⅱ厄介」という図式、及び男女のジェンダーの固定化は、渡辺自身の性意識の投影とみなしていいのではないか。

そうした「性Ⅱ厄介」なものであるという見方は、「大人Ⅱ厄介なもの」としてやはりさらなる一般化がされている事に注意したい。第二部「男性」で、北海道立の共学の高校に進学した伸夫は、そこで麻子という同級の少女に惹かれていく。「伸夫の頭の中にはいつも麻子がいる」ようになる。自分が麻子に好意を持っていると自覚した伸夫は、教室のなかで麻子の方を眺めながら、「人を恋する難しさは、こういうことをいうのかもしれない」と思い、「いままでは、大人達は朝起きて仕事をして、夜になると食事をして休むだけだと思っていたが、そんな単純なものではなさそうである」という実感を持つにいたるのである。麻子という「女性」への思いが、彼の心を一人の「大人」へと発展させていくのである。やはりここでも一般論である。セックスへの関心、「性的感興」への思いが、「大人」とは何かという問題へと発展していくところに、『影絵』が単なる個人のセクシュアリティの問題を面白おかしく描き出した作

品ではない価値があるように思われるが、いかんせん一般論にすり替えてしまふところにこの作品の弱さがあるようにも思える。実際、仲夫は、麻子との恋愛、そして別のクラスメイトとの浮気を通じて、「もうひとつ先の世界を垣間見た」ような思いを抱く。そして、「こうやって、だんだん大人になっていくのだろうか」と一人でつぶやきながら、「仲夫は道の世界にすすんでいく自分が不気味になる」と考える。これも一般の男性が成長する過程で必ず抱く感覚である。

こうした仲夫の描写に付きまとう男性の一般的な感覚は、渡辺の実感として読みとることが出来る。そして、思春期、「純粹で無垢な」子どもが、一人の複雑な思いを持つ大人の男として成長していく過程を、私たち読者全体の問題として投げかけているように思われる。その意味ではこの作品にみられる性の煩悶の「一般化」は一定の評価が与えられるべきであろう。本稿の最初に示したように、『影絵』がまず「性的感興」とは何か、という疑問を投げかけたのは、そうした「大人」の人間が社会に出て生きる時に必ずぶちあたる「性」の問題を敷衍化し、性への感興と煩悶を一生の課題として抱き続ける人間の性と生の矛盾を描き出しているように思われるのである。

五. 終わりに

最近話題になった渡辺淳一の随筆集に『鈍感力』（二〇〇七年）がある。その中で渡辺は「忘れてならないのは、男と女はまったく違う生きものだ、ということ」―だと述べ、その直後に「男と女は基本的に違ういききもので、とくに肉体の原点が違うのです」と述べている。だからこそ、「大事なのは鈍感力」なのだと言っている。見せるのである。

こうした見解を元に『影絵』を読み直してみると、性意識が芽生えることを感興と煩悶の狭間で

「厄介な感じ」であるとし、男と女の間を「突き刺すもの」と「入れられるもの」と附わけしていたことから、渡辺自身の固定的な性意識が如実に反映された作品と評価することができよう。それが、以降の作品にも反映され、かつ現在は「鈍感力」と言う言葉で、得意の一般化を継続しているのである。ただ、渡辺自身の少年期の感興と煩悶は、現代のセクシュアリティ・ジェンダースタディの格好の対象でありつづけることも事実だ。男女の営みが受動と能動の関係にあることは確かである。渡辺の性描写の緻密さを考えた時、果たしてセクシュアリティ・ジェンダースタディがどこまで対抗できるかは、今後の課題と言えるのかもしれない。

脚注

1. 志村有弘「渡辺淳一（失楽園）」『国文学 解釈と鑑賞』二〇〇八年四月号
2. 本稿の『影絵』本文の引用はすべて扶桑社文庫版（二〇〇八年六月）による。
3. 岡田洋司「男の青春」『男性史1 男たちの近代』二〇〇六年十二月 日本経済評論社所収
4. 男らしさのジェンダーの観点からの考察については、ジョージ・モッセ『男のイメージ』（作品社 二〇〇五年四月）やジュディス・パトラー『ジェンダー・トラブル』（青土社 一九九九年四月）を参照のこと。
5. 赤川学『セクシュアリティの歴史社会学』勁草書房一九九八年。近代のオナニー言説の詳細については、この著作を参照した。
6. 澁谷知美「性教育はなぜ男子学生に禁欲を説いたか」（井上章一編『制欲の文化史1』講談社新書メチエ二〇〇八年十月所収）
7. ここで注目しておきたいのは、北上次郎が『情痴小説の研究』（一九九七年四月 マガジンハウス）の渡辺淳一『ひとひらの雪』を論じた時に、渡辺淳一の作品に登場する男性の主人公は、「なんでも一般化してしまう男」が多く、それは「自己弁護のうまい中年男の助平話にすぎない」と批判している。
8. ジェフリー・ウィークス『セクシュアリティ』（上野千鶴子監訳版 河出書房新社 一九九六年四月）
9. 山本明『カストリ雑誌研究 シンボルに見る風俗史』一九七六年七月 出版ニュース社（引用は 中公文庫版一九九八年八月による）
10. 水口義則「解説」『影絵』扶桑社文庫版二〇〇八年六月所収
11. 渡辺淳一『鈍感力』二〇〇七年九月集英社。引用は集英社文庫版 二〇一〇年三月による。

（やまだ けんいちろう／日本文化学・博士研究員）